

第11回せんがわ劇場演劇コンクール講評

～ムニ『真昼森を抜ける』～



銀粉蝶

戯曲からは圧倒的に『水』のイメージ、海、釣り、浄水場など、を受け取りました。最後に『全部水の中』という台詞まであります。滅びた世界が水の底に沈んでいるイメージ。

タイトルと水のイメージが結びつかず、どうやるのかと上演が楽しみでしたが、結果、タイトルと中身は私の中では離反したままでした。ま、タイトルなんてなんだっていいという考えもありますからね。

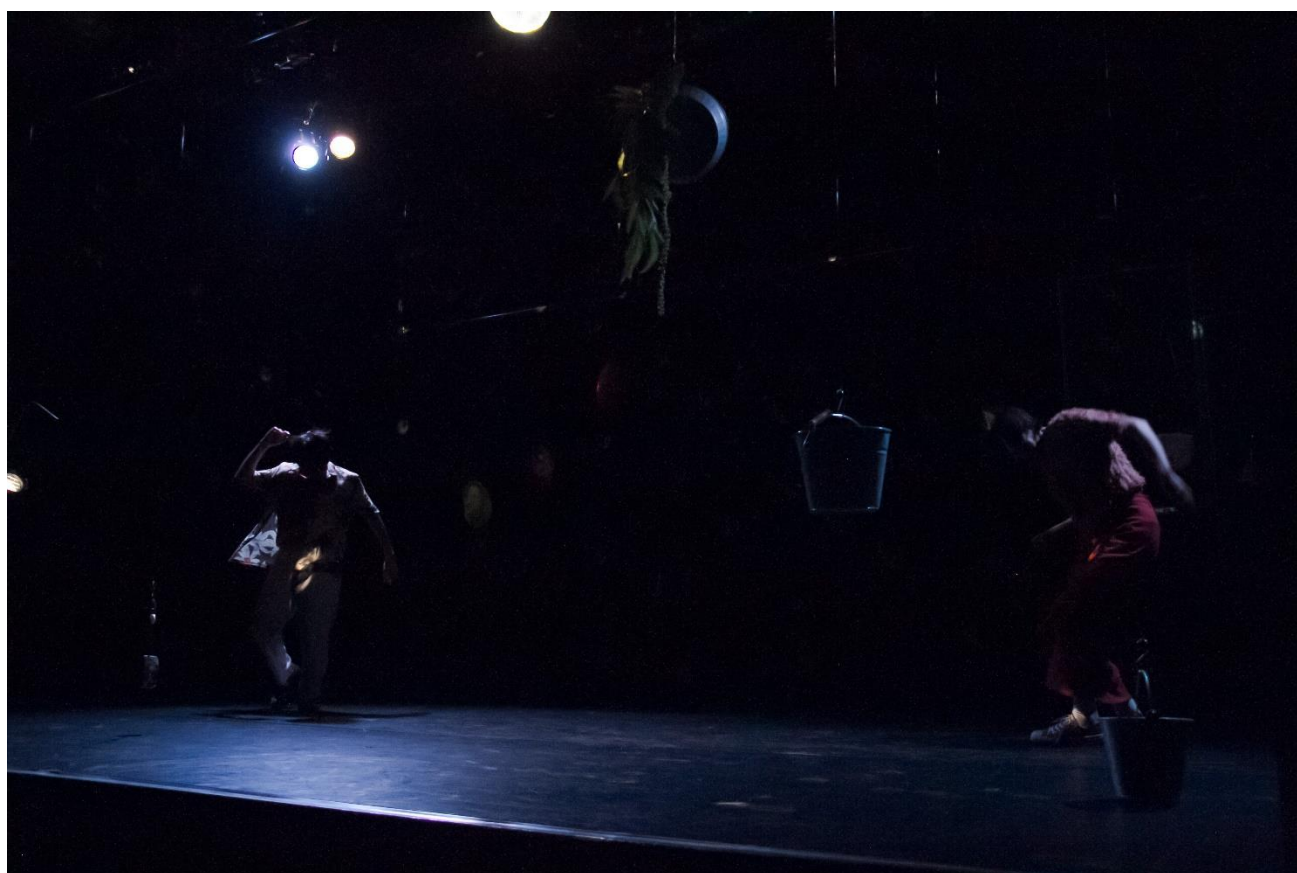
全体的に演出は繊細だったと思います。中でもディスコのシーンは印象的でした。照明がもうちょっとカッコよく決まればよかったのに。

俳優にはもっとハードルを上げた方がいいと思います。

多田淳之介

このコンクールではグランプリとは別に演出賞があるので、上演のクオリティとは別に演出の作業をどうというスタンスでやっているのかということを出演賞の基準としました。宮崎さんも含め作家が演出家も兼ねているという人がほとんどでしたが、僕は演出賞には宮崎さんを推しました。上演の完成度はグランプリの「ほろびて」の方が高かったと思いますが、戯曲に対してどういうアプローチをしていくか、空間をどう作ろうとしているかという姿勢が一番感じられました。個人的には、ミラーボールのシーン

がとても面白かった。喧噪はもちろん、喧騒の中の静寂、全く別の空間に見える瞬間もあって、僕はあのシーンだけが40分続いても見てられます。5団体の上演で一番印象に残ったシーンでした。それだけで演出家賞に相応しいと言えるかもしれません。美術に対する姿勢や、理由は全くわかりませんが実際の小道具が登場するのかマイムで構わないのかを台本に書き込んであったり、何か新しい表現が生まれてくる要素を感じました。あとは他団体も含めてですが、若い俳優さんは上演時間の中で自分や役の身体にどういふ変化が起きていくのかを意識できると、表現の選択肢が増えると思います。ムニの演技スタイルはまだ途上にあるとは思いますが、戯曲の場面や時間が変わるように、身体やそれによる発語やそれによって生まれる表象にも変化があると、もっと観客を引き込めると思いました。作家が演出家も兼ねる場合、自分にとっての価値と、他人にとっての価値とのバランスが当然大事になってきます。作家は自分の世界観をもとに表現し、演出家は今その世界観が作家以外の人にとっての価値を持ち、どこにどう届けるのかを考える仕事です。自分の感覚を育てる時期は自分の世界観が他者に受け入れられるだけで満足だと思いますが、本来演出とは、自分ではない人間の作ったものを他者に届けることを言う(と自分は考えている)ので、できるだけ早いうちに演出する経験もしておく、自作演出にも役に立つのではないかと思います。



西尾佳織

出演者の南風盛（はえもり）もえさんの立ち方と声、発語の仕方がすごく気になってしまいました。審査会では「村上春樹の小説を読んだ時に感じる『なぜこの人がモテる？』というのと同じ感じを、この作品世界の女性に感じました」と言ったのですが、他人に対して薄い。この人に対して登場人物の男の人が好意をもっていくという流れに、私は説得されませんでした。

上演における表^{ひょうしょう}象し方としてなぜあの形を選択したのか？なぜこういう発語なのか？というところがすごく気になって、演出家の宮崎さんはどういう判断でこの発語を選んでいるんだろうか、とも思いました。

いいと思ったのは、世界の姿に野心を感じたことです。「世界が水の中にある」とか「水の上を歩いている人がある」とか、普段私たちが生活している世界の並び順とは違うありようを想像させられました。それを、大きなこととしてドーンと「どうだ！！」と出してくるのではなく、本当にささやかな手つきでなされているのがよかったです。

一番好きだった瞬間は「のうのうと生きてる奴らよ！」みたいなことを男の人が言ったのに対して、女の人がそれに乗るんじゃなくて「ちょっと怖い」と言ったところです。いや、ほんと「ちょっと怖い」よねって。「世界をぶっ壊せ！」みたいなことを思う瞬間があったりしますが、2人してそっちの物語に行くのは簡単で面白くない。「ちょっと怖い」という一言がとってもいいなと思いました。

ムニさんは作と演出を一人の人が兼ねてつくられているということを強く感じました。特に始まってすぐ、冒頭のシーンが音楽的な感じで、台詞のタイミングまで細かく作り込まれた言葉の応酬があり、音の高低もある。それが面白かったのですが、「外から振り付けられてるなあ」という感じがしました。もう少し俳優と一体になったらもっといいだろうなと。

作と演出を兼ねていることが必ずしも悪いとは思いませんが、戯曲を読んだ時に、読む側にとってはどちらでもいい事というのが多く書かれているように思いました。例えば終わりの、俳優による語彙解説とかです。そういう現場の遊びや空気感のような、上演の範疇のことが台本にも入ってきている。台本を見た時に、作品世界の必然と言えるものと、そうではなく「これは現場の遊び」みたいなものがあると思っていて、「この戯曲にとっての必然はどれか？」がもっと明確になり得ると思いました。

戯曲にとっての必然で書かれていれば、演出家も俳優も同じ距離で扱えます。書いている本人だけが感覚的に扱えることだと、それは作・演出家に占有されてしまう。劇作家として「俳優にどう（言葉を）渡していくか」という問題があると思います。俳優と作・演出家が一緒につくっている部分がムニさんの良さでもあると思うのですが、戯曲にとっての必然と上演にとっての必然とがもう少し腑分けされ、整理された思想として研ぎ澄まされていけば、もっとグサッとくるだろうと思うところが細かく色々ありました。

台本にも上演にもきらめきを感じたのですが、観客は優しい友達ではないので、「どちらでもいい」みたいなことが沢山あると、つくっている側が意図していない方にどんどん作品と観客の関係が進んでいってしまうかもしれません。

ムーチヨ村松

まず、美術的なこととか空間の使い方から話します。

(海に向かって手を振ったり、向こう側から手を振ったり)人が対面している演出について、舞台上で表現する空間的なアプローチを、もっともっと洗練させていくと、すごく良いんじゃないかなと思いました。観客席とステージが向かい合っている以上、この部分を、ムニさんなりのアプローチで、今後いろいろやっていくといいんじゃないかなと思いました。美術的なアプローチも、もっと様々な演劇の美術を観察するのいいと思います。(今回美術家がいらっしゃったかわからないのですが)感覚的にチョイスしていることが多いのではと全体を観て思いました。演劇とは総合芸術だと僕は思います。どれか一つが特化するのではなく、色んな人たちが集って創っている。舞台美術が一切ないという舞台なら、美術家や小道具さんはいないわけでもいいのですが、もし使うのであれば美術家としての存在感がもっとあっていいと思います。

役者と俳優、ライティング、音以外の要素が入りこんで舞台を創っていくのであれば、一緒にクリエイションするスタッフ＝チームを創り上げていくとすごくいい結果が出るんじゃないかと僕は思いました。宮崎さんの感覚的なアプローチが、チームの中で精査していくという作業をどんどんやってほしいなと思いました。

演出面でも、演技演出と構成演出と身体表現と全部もりもりの作品だなという印象を受けました。ダンスホールのミラーボールのアプローチもステキでした。釣りのシーンにしても、自転車のシーンにしてももっともっといろんなアプローチに挑戦して、表現の幅を縦にも横にも深くしていくと面白そうだなって思いました。

徳永京子

正直に言うと、この作品も戯曲のスケールのほうが実際の上演より大きかったです。ただ、宮崎さんの演出が良いと思ったのは、力の入ったフックのあるせりふより、特に意味のないような短い会話がおもしろく聞こえる点でした。例えば「こんにちは」「どうも」と交わす会話が、舞台では時空の余白を広げるものになって、妙に印象に残るような。そうした平易な言葉の跳躍が最も感じられ、演出家賞にふさわしいと思いました。

登場人物が男女ふたりで、場が変わる度にまったく違う組み合わせとも受け取れるし、同じ人物が関係性を変えながら出会い直しているとも、ひとりの老人の人生の振り返りとも受け取れ、その可能性の広がりには興味深かったです。ただ、シチュエーションが変わってもふたりの距離感が常に一定に感じられ、それが作品を深めていかない要因に感じられました。さらに言ってしまうと、俳優が役人物として物語の時間の中に存在して相手と対峙しているのではなく、ふたりとも素の自分のまま、ずっと演出家のほうを向いていると感じてしまいました。

また、アフター・ディスカッションでも話題になりましたが、せっかく吊るしてある小物が生かしきれていませんでした。ムニさんの公演を何度か拝見していますが、むしろ美術と物語が密接に関係しているイメージがありますので、今回はそれを感じる事ができず残念でした。



撮影：青二才晃